

常識を揺さぶり本質に迫る地理の楽しさを

大分大学 永田忠道



1 実践「地球儀と地図を使って調べよう」

今年の4月に、中学1年の地理授業「地球儀と地図を使って調べよう」(大分大学教育福祉科学部附属中学校:衛藤展一先生による実践)を参観した。帝国書院の『中学生の地理(最新版)』(以下、教科書)では、p.14~15の「地球儀と世界地図のちがいを調べよう」に該当する部分である。

本稿では、この授業を紹介することから、はじめたい。なぜか。それは、この授業の反省会において、議論されたのが、「地理の楽しさとは何なのでしょうか」だったからである。では、授業の大まかな流れを、以下に簡潔に整理してみる。

授業ではまず、実践者の衛藤先生が、大陸の切り抜きを示しながら、これは何大陸ですか、と各大陸を確認しながら、黒板に貼りつけていくことからはじめられた。次には、黒板に不正確に貼りつけられた各大陸の位置は、これでよいのかどうか、問題とされる。ユーラシア大陸と北アメリカ大陸は、もう少し近づけた方がよいのか、離れた方がよいのか、等々、子どもたちからさまざまな見解が提出された。

ここまでの先生と子どもたちのやり取りを見ると、子どもたちのある反応をうかがうことができた。それは「先生、そんなことはもう知っている、今さら確認しなくてもいいじゃないか」である。これは、子どもたちが発言をした訳ではないが、先生と子どもたちのやり取りを見ていると、そのような声が聞こえてくるようだった。つまり、ここまでのやり取りを、子どもたちはみるからにつまらなそうな顔をして取り組んでいたのである。しかし、この子どもたちの反応は、実はこの授業において、先生が用意した仕掛けでもあった。

すなわち、ここまでの活動で先生が狙ったのは、子どもたちにすでに埋め込まれている地球上の位置関係の常識を再確認することだったのである。

黒板上で大陸の位置関係に関する子どもたちの常識が確認された後に、今度はミラー図法の掛地

図を指しながら、先生は次のような発問を行った。「日本の東にはどんな国がありますか」である。この発問に子どもたちは口々に、「アメリカ」、「アメリカ合衆国」と答えながら、その言葉の裏には「そんな常識じゃないか」と言いたげであった。そこで先生は「本当に日本の東はアメリカですか、本当に、本当に」と問いかけ、では本当かどうか調べてみようということになった。

「日本の東はアメリカ合衆国かどうか」、それを調べる手段としては、教科書p.15にも掲載されている地球儀とテープを使用する方法が用いられた。先生が手本として、地球儀とテープで日本の東を示すと、その先はアメリカ合衆国ではなく、南アメリカのチリ共和国となった。

そこで先生は、「日本の東はアメリカ合衆国ではなく、チリ共和国になったけれど、みんな納得できますか。本当に納得できますか」と問いかけた。

まると地球儀と平らな世界地図のちがいは何だろう。距離はどうかかな?

① 地球儀で南アメリカ大陸とグリーンランドとの面積を比べると...

② まると地球儀を平らにすると...

地球儀と世界地図
地球儀は地球の模型です。地球儀の上では、距離や面積、方位などが、すべて正しくあらわされますが、世界全体を一度に見わたすことはできません。そこで、世界全体を一度に見られるように、まると地球を平らにしてくれたものが世界地図です。世界地図は、地球儀のようにすべてを一度に正しくあらわすことはできませんが、面積が正しい地図、距離と方位が正しい地図など、使う目的に応じてたくさん種類がつけられています。

地球儀での距離と方位のはかり方

④ 地球儀での距離のはかり方
紙のテープを北極と南極の間にはって、20等分すると、1目盛りが1000kmのものさしになり、距離をはかることができます。方位をはかるには、紙のテープを直角にはりあわせ、交わったところを、方位をはかりたい場所におきます。1本のテープを経線に合わせると、もう1本は東西を示します。

⑤ 地球儀での方位のはかり方

1. 図①、②のグリーンランドと南アメリカ大陸の面積を、図③と比べてみましょう。
2. 地球儀で、東京とロンドンの間と、東京とナイロビの間の距離をはかってみましょう。どちらが遠くにあるでしょうか。また図④、⑤ではどうでしょうか。
3. 東京から飛行機で、飛行機でまっすぐ飛びつづけたら、どの大陸につくでしょうか。

ステップアップ



さらに「掛地図で見ると、どう見ても日本の東はアメリカなのに、地球儀ではチリになるけど、どうしてなのだろうか」との発問も投げかけた。

この発問に対して、子どもたちはいろいろな持論を披露したが、本授業の最初のような「今さらそんな」的発言ではなくなっていた。すなわち、子どもたちはここまでは、大陸や、日本とアメリカ合衆国の位置関係に対して揺るぎない常識をもっていたのだが、先生の功名な授業展開によって、その自信が徐々に揺らいできたのである。

ここで先生は「地球上の位置関係については、みんな先生がしたり、言っただけでは納得できないと思います。では、これから皆さん自身で確かめてみましょう」と指示をした。地球儀とテープは各班に一つずつ用意されて、班ごとに日本とアメリカ合衆国だけにとどまらずに、いろいろな位置関係の確認作業が行われた。

このときの子どもたちの活動のようすは、本授業の前半部分とはまったく異なるものだった。授業の前半までは、大陸の位置関係や日本とアメリカ合衆国の位置関係に関する常識の罫に陥っていた子どもたちは、その常識を当たり前のものとして認識しており、それを問う先生に少々面倒くささも示していた。

ところが、授業の中盤において、子どもたちの常識に揺さぶりがかけられた途端に、子どもたちの地球儀とテープでの確認作業は、実に熱をおびたものとなっていった。作業中にも「確かに地球儀とテープでやってみると日本の東はアメリカではないけど、なんでだろう」、「だったら掛地図とか、地図帳はいったい何なのだろう」等々、さまざまな思考をめぐらせることになった。さらに、



子どもたちは、地球儀と地図帳と掛地図を見比べながら、しきりに頭をかしげては、地球儀を回してみたり、じっと見つめてみたり、と多様な活動も付随的に展開させた。

事前の授業計画では、このような地球儀とテープの活動の後に、では各種の地図はいったい何なのかを、地図の特性と活用方法の面から探る活動も想定されていたが、子どもたちが地球儀の活動に熱心に取り組んでいたこともあって、先生はあえて、各種地図の特性まで無理に進むことはせずに、本授業は終わられることになった。

2 授業反省会での議論

本授業の後には、社会科の教員だけでなく、すべての教科の教員の参加による授業反省会がもたれた。そのようすも簡潔に以下、紹介してみる。

反省会の冒頭では、指導案と実際の授業の整合性等々が議論されて、徐々に授業の本質的な部分にかかわる論議も展開された。そのやり取りの中で、特に活発な議論がなされたのが、次の点であった。それは「今日の授業は子どもたちが楽しそうに活動していたが、結局のところ、地理の楽しさとは何なのでしょう」であった。

この発言は、最初に社会科以外の先生から発せられた。だからこそなのだろうか、非常に新鮮で議論の俎上に載せるに値する発言だと感じた。この発言については、たとえば「地球儀や地図に触れること自体が楽しいのでしょうか」、「地理だけではないが、とにかく活動ができることが楽しいのではないのでしょうか」といった意見や、「想像的に空間的なひろがりの中でのものごとを考える楽しさだと思います」等々、地理の楽しさに関するさ



まざまな見解が、提示された。

本授業を参観して、確かに子どもたちは、じつと物事を考えたり、いわゆる座学よりは、何らかの活動をともなった方が、楽しさを感じるだろうことは、改めて痛感させられた。しかし、本授業において、もしも、ただ単に地図が示されて、地球儀とテープが用意されただけだとしたら、果たして子どもたちの意欲的で追究的な活動が実現したのだろうか。本授業で子どもたちが実に楽しそうに地理授業に取り組んでいたのには、地理的な教具や、活動主義的な学習方法だけではない、別の要因があったと考えられる。それは何なのだろうか。

3 地理常識を揺さぶり本質に迫る楽しさを

本授業における「地理の楽しさ」の要因は、実践者である衛藤先生の巧みな授業構成によって、子どもたちの地理常識が揺さぶられたことにある、と指摘をしたい。本授業では、子どもたちが中学校以前から、地図帳やマスメディア等々を通して、暗黙のうちに育成されてしまったミラー図法的常識に気づき、自分たちが漫然と認識していた地理常識を、修正する必要性に迫られた楽しさが、現出されているのである。

「地理の楽しさ」というときには、これまでもマスメディアで示されるような楽しさを、学校の授業に持ち込もうとする傾向が根強いが、それは学校ではなく社会教育や生涯学習の場等々で、いくらかでも実施可能なことである。学校における社会科地理の授業での「地理の楽しさ」は、授業の中でしか実施できないことこそを、追い求めるべ

きである。では、社会科地理授業の中でしかできない「地理の楽しさ」とは何か、と問われたときの答えの一例が、本稿で取り上げたような授業展開のあり方である。

それは換言すると、ある意味において地図の罫にはまっている子どもたちに、なぜ各種の世界地図が製作されて、存在しているのかを、地理学の本質的なレベルにおいて認識させようとしていることにあるといえよう。

普段の生活やマスメディアを通して形成された一面的な地理常識に気づかせて、その常識を地理学の成果に即して修正したり、改めていく「楽しさ」は、本授業での題材である「地球上の位置関係」だけにかかわらず、すべての地理教材や題材に備わっているものである。

たとえば、「地域の規模に応じた調査」の学習において、いくつかの国々を取り上げるが、子どもたちの多くは学習の以前に、すでにそれぞれの国に関する一定の常識を多かれ少なかれ持ち合わせている。このような子どもたちの既得常識は、ほとんどの場合、偏っていたり、場合によっては誤っていることが多い。この未熟な常識を、学問的な成果に基づいて修正し、より誤りの少ない認識を形成する場こそが、学校における授業なのである。そのため、地理を担当する教員の大事な仕事とは、ただ漫然としているだけでは気づかない未熟で誤った地理常識を、科学的な地理認識（社会認識）へと導くことであろう。それは、笑いをともなうような楽しさではないかもしれないが、学問的にも意義深い楽しさであり、それこそが、地理の本質的な楽しさでもあると、信じてやまない。